

小さな手に引かれて並べた二つの手には同じ指に同じデザインの指輪がはまっている。

「宝石がないじゃない」

ペアリングにまるまるい目を輝かせていた五歳の神父ががっかりした顔で言つた。

彼女は隣の家の末っ子だ。両親は親戚の結婚式に出かけて行つた。

「なんでチビは連れてつてもらえなかつたんだよ」

留守番を任せているハウスメイドがそこらへんを掃く手を止め、たまたま買い物帰りに庭で遊んでいた彼女に捕まつた俺たちの疑問に答えをくれる。

「新郎新婦が大の犬好きなんですよ。挙式にも大型の愛犬を三頭も連れてくるんですって」

「ちっちゃなワンちゃんだったら大丈夫だったかもしれないのに……」

大の犬嫌いがぶつくさ言うが、リードをつけたポメラ

ニアンドすれ違つても涙目のお子様だ。

「犬が別室待機でもなけりや無理だろ」「無理って言わないで！お姫様みたいなドレスの花嫁さんが見たかったのに」

ふんわりレースやキラキラしたティアラ。可憐な花を束ねたブーケ。彼女はそういうのが好きだつた。その夢のような世界観で空間が満ちるイベント。それが結婚式だ。

ドレスならクリスマスのパーティでも着ていたはずだが、生憎と家に長くて白い石造りの階段や舞い落ちる花吹雪の演出はない。

「お前が将来結婚するときは犬抜きでやれよ」

「当たり前でしょ！」

元ヤクザの外国人相手にも気丈に言い返す。

肝は座つているが、それでもまだ五歳児だ。

「あー、やだー！やっぽり行きたかったあ！」

芝生の上で手足をバタつかせて駄々をこへはじめた。

「つつても今更どうしようもねえだろ？次のチャンスがあるって」

「じゃあ貴方達が式をやつて挙げたらどうですか？」

いい加減に慰めてすぐそこにある家に帰ろうとした俺に、家政婦がにつり笑いかける。家政婦も子守が面倒なのだ。他にやるべき家事もあるのに今日のお嬢様はご機嫌斜め。押しつけられる先があるなら押しつけたい。

「白詰草を編んで冠や指輪でも作つたら可愛らしい結婚式ができますよ。今日はこんなにいいお天気なんだもの」

「ナイスアイデア！」

飛び起きて芝のかけらを撒き散らしながらバンザイした少女に連れが顔を顰める。

もうこうなつたら家に帰つてもしつこく呼び鈴を鳴らされるだろう。焚きつけた家政婦は当然あてにならない。

この家に引っ越しして二ヶ月半。海外赴任なんて理由もなく、アジア人の男一人きりで生活する俺達は、周囲には夫婦ということになつてている。実際、母国で籍は入れなかつたけど、恋人関係から国外逃亡の共犯者になり、何年も一人きりで暮らしてきた。事実婚と言つても嘘じやない。

母国で指名手配されている罪は冤罪だったけど、それをすぐに立証するのは難しく、家族や仲間のために国を離れた。今でもれつきとしたらお尋ね者だ。

それを隠すために隙のない嘘を考えるより、母国は同性夫婦に不寛容だから移住したのだと答える方が楽だつた。実際、母国は同性愛への理解においては今ひとつだ。

とはいえ、

「理解がありすぎるのも問題だな」

まんまと子守を押しつけられて青空結婚式が始まった。

新郎が二人だから二人ともお姫様ね、ときうトンデモ理論で花冠は二つ用意された。文句を垂れる割りに連れは手先が器用で、白詰草の編み方をよく知つていた。

教会は庭の芝生。サムシングフォーというおまじないになぞらえて、新しいもの、古いもの、借りたもの、青いもの揃えた。俺たちが買つてきた新品のCDと中古のレコードと、青い石のついた彼女の母のブローチだ。勝手に持ち出して後で怒られるのが目に浮かぶ。

神父役の彼女は俺たちが指にはめているペアリングを檢めて、石のないシンプルなものであることに不満を漏らして蒲公英の指輪も作つた。彼女の夢は大きな宝石のついた指輪なんだそうだ。

「はいどーぞ。わたしは指輪を運ぶ妖精さんだからね」

神父兼妖精の命令は絶対だ。連れが俺の手を取りペアリングと同じ指に通してくれる。

「これ花が重くてすぐ回っちゃう」

緩く作られた指輪は手を動かすたびに大きな黄色い花

が揺れてしまう。

「茎を締めてやりやいい」

もう一度手を取った連れが一度指輪の結び目を解き、指

にフィットするようきつめに結び直した。

「さすが素敵な旦那様だわ」

「もうぶち切らなきゃ外せねえけどな」

「ずっとつけてたらいいじゃない」

永遠の誓いだもの、と言つて肩に白いタオルを掛けた

神父が絵本を開く。

「さあ、誓いの言葉よ。いい？」

空に浮かんだ雲が太陽の前から退いて明るい光があたりの芝生を照らす。

雲間に演出されたスポットライトの中で身長100セン

チで舌つたらずな少女神父はえへんと咳払いをした。

「やめるときもすこやかなるときも……えーと、一緒になかよくすごしましたか？」

「過去形かよ」

「なによ！」

新郎が小さく吐き捨てた文句に素早く言い返す神父。

怒ったときの彼女のママそつくりだ。

「いいじゃん。合ってるよ。すごしました」

割り込んで片手を上げ、答えるとすぐに機嫌は治った。

「はい！こっちの新郎は？」

ちゃんとしてよ、という目で促すけど案の定、

「どっちも新郎じやねえか」

また神父を怒らせる。やる気がないよう見えるけどでもままでとにかく付き合うだけの誠意はあるから許してやって欲しい。

「答えて！」

「はいはい、すごしました」

二人分の返事を受け取ると彼女は大きく頷いて手にしていた絵本をパタンと閉じた。

「よろしい！ふたりは永遠に良き夫婦です！」

その誓いの言葉があんまりデタラメで思わず噴き出した。神父っていうより学校の先生みたいで。

「はあ、やっと終わつたかよ」

集めた花弁を俺たちの頭に振りかけながら彼女は言う。

「あなた達、結婚式やつてないんでしょ？」

「そんなモン要らねえからな」

「必要よ。祝福された二人は幸せになれるんだから」

俺たちはその言葉に何も返さなかつた。

大事な家族に次会える日も分からぬ逃亡生活は、彼女の言う幸せとは違つたから。

結婚式も誓いの言葉も俺たちにはなかつたけど、共犯関係と異国でふたりきりの生活が何よりも強固な繋がりだつた。

「へえ、駆け落ちしたの？いいねえ、ロマンだね。俺も若

い頃は金持ちのご令嬢に惚れてた。財産じやなくて優しがな彼女自身にね。だけど意気地がなくて何もせず何年も経つて、気がついたら気の強い嫁と見合いしてたわけよ」

暇そうな宿の主人がカウンターに頬杖をついてチエックインの書類を書く間にペラペラ喋る。身分証の確認も適當だし部屋の管理も適當だ。几帳面な弟だつたら絶対嫌な顔する。そんな宿だけど、これまで宿泊してきた様々な宿を思えば主人も疑り深くないし客も少なくて気楽な方だ。

「アンタの嫁の話よりネットは使えるのかって聞いてんだよ。外に貼り紙してただろ」

「おお、そうだった。あっちの部屋にパソコンがあるから自由に使つていいよ。時々近所のじいさんが借りに来るから、そうしたら代わつてやつてくれ」

戸板もない戸口から隣の部屋を覗くと、意外と新しい機種のデスクトップパソコンが木製の机に一つだけ置かれていた。壁も床も土で塗りっぱなしの床板も壁紙もな、天井の隅で古い扇風機が回つてているばかりの部屋でパソコンだけが浮いている。

チエックイン手続きを済ませて連れを追いかけ、パソコンのある部屋に入ると、ブラウザのアドレスバーにはすでに暗記したURLが打ち込まれエンターキーを押すところだつた。

とある日本人女性のなんでもない日常が綴られるブログだ。作った料理の写真やレシピ、友人と撮影した写真や街のポートレート。タレントや何かの専門家でもない一般人のブログだから、恐らく読者数もそう多くない。ごく個人的な、連れの妹の日記だ。

数ヶ月住んでいた街から移動して国境を越え、車中泊を繰り返し、ようやくたどり着いた宿のある街でインター ネット環境のある施設を探しここに決めた。ブログを見

るのも久しぶりだ。

元気に更新されていることだけ確認したらすぐに閲覧の痕跡を消して接続をやめる連が、今日は画面をじつと見つめていた。

「何かあった？」

パスポートをしまいながら丸めた背中に声を掛けると、ぱつり。

「合歓が結婚した」

驚いて肩をぶつけたパソコン前に割り込み画面にかじりつく。

モニターには連れた同じ色の髪を結い上げて花をあしらったヴェールをつけ、真っ白いウェディングドレスで微笑む花嫁の写真が写っていた。

きれいだった。

「そつか……良かつたじゃん」

近くでおめでとうを言うことはできないけど、こうしてブログに書いておけば兄が見つけてくれると思つて載せたんだ。幸せに暮らしていることを教えてなくて。

「ああ、旦那も、まあ悪くねえ」

ずっと日本で暮らしていたら妹の連れてきた相手がど

んなに誠実そうないヤツでも一発ぐらい殴つていたかもしれないシステムが、自分の手の届かないところにいる妹を大事にしてくれる男のことをそう評した。

結婚を報告する記事はいつもより長く、何枚も写真が添付されていた。

友人たちとの写真、参列した俺の兄弟と写る写真。彼女は今でも俺が兄と一緒にいるつてことも信じてくれてる。

「ん。なあ、なんか変じやね？」  
「変？」

何枚目かの写真で気が付いたが、花嫁のブーケが二つある。一つは彼女によく似合う白や淡いピンクのブーケ。もう一つは鮮やかな青と白の薔薇で作られたブーケだ。まとめて持つと半々に色が分かれた珍しいデザインのブーケのようにも見えたが、でも違う。ブーケは二つある。「サムシングブルーって奴だろ。青いものがあると幸せになれるつづーゲン担ぎだ」

「そりや聞いたことあるけどさ……」

結婚式に夢見る少女が隣人だつた頃に聞かされたから。「でも普通そういうのって別の小物とかに取り入れるん

じゃ……あ」

スクロールして新しい写真が現れる。

「——これさ、もしかして、俺たちの分?」

花嫁と俺の兄弟たちが三人でカメラに花を差し伸べて  
いる写真だった。

持つべき主役に渡そうとするアシスタントみたいに柄  
を見せて、花嫁が青と白の花束をカメラに差し出してい  
る。兄弟たちは薔薇とは別の、枝にいくつも花のついた  
白と紫の花を一本ずつ。

「この花ってなんて花?」

「俺がそんなの知るわけねえだろ。……蘭じやねえのか?」

似てるけどよく見たことのある胡蝶蘭なんかじゃない。

「結婚式の花で検索してくれよ。一本だけ持つてんだから  
なんか、なんかあるんだって!」

結婚式に人気の花を調べて写真を見ていくが、これと  
いうものが見当たらない。

「…………結婚祝いの花、か」

検索ワードを変えて調べていく。そうすると間もなく  
兄弟たちの手にしていた花が見つかった。デンファレと  
いう洋ランの仲間だった。

花屋のウェブサイトで花の写真に併記されたデンファ  
レの花言葉は

——お似合いの二人。

長旅で土ぼこりと汗で汚れたシャツの肩を震える手が  
抱く。そのぴかぴかの新郎には程遠く汚れた手に手を重  
ねて握りしめた。

そのブログは妹から兄へ元気に暮らしていることを伝  
える日記だった。世界中でただ一人のために日々更新さ  
れる。

結婚式の記事はパートナーや仲間と一緒に元気に過ご  
しているというメッセージだ。みんなに祝福されて幸せ  
だつていう。

それから、この写真はきっと俺たちへの祝福。  
いつか聞いた舌つたらばな言葉を思い出した。

『祝福された二人は幸せになれるんだから』

寄り添つて何年目かの青空の日だった。